

ヘヴィメタルと古典古代の共鳴

庄子 大亮

1. ヘヴィメタルと古典古代

現代において誕生した音楽ジャンルで、激しさを特徴とするヘヴィメタル。そして、古典古代すなわち古代ギリシア・ローマの歴史や文化。奇妙な組み合わせと思われるだろうが、実はこの両者には深いつながりがある。ヘヴィメタルは一般にあまりよく知られていないか、知られているとしても何やら物騒とのイメージが先に立つかもしれない。そのヘヴィメタルにおいて、古典古代にまつわる題材を扱っている楽曲が驚くほど多く生み出されており、近年その関連性についてアカデミックな研究がなされているのである。

古典古代に関わる例を挙げよう¹。ホメロスの叙事詩をテーマにしたものならば、Manowar (USA) “Achilles, Agony and Ecstasy in Eight Parts” (1992)、Symphony X (USA), *The Odyssey* (2002)。ギリシア史であればアテナイ僭主暗殺の英雄を題材にした Thy Catafalque (HUN) “Deathless Souls Roam”、ペルシア戦争を題材とした Sacred Blood (GRC), *The Battle of Thermopylae: The Chronicle* (2008)。またアレクサンドロス大王はヘヴィメタルにおける人気の題材で、その生涯について歌った Iron Maiden (GBR) “Alexander the Great” (1986)が代表的である。ローマ史に関わるものも枚挙に暇がなく、Ade (ITA)や Imperivm (ITA)、Ex Deo (USA, CAN)といったバンドが継続的にローマ史を題材にしているし（近作では Ade, *Rise of the Empire* [2019]; Imperivm, *Holy War* [2020]; Ex Deo, *The Thirteen Years of Nero* [2021]）、他にもローマ建国神話や、アクティウムの海戦といったローマ史上の重要な出来事、皇帝を取り上げた曲が無数にある。そして、ローマ軍が敗れたトイトブルク森の戦いもよく注目されるように、ローマと戦った者たち、ゲルマン系・ケルト系部族なども題材に加わる。これらはごく一部の例に過ぎない。ヘヴィメタルは古典古代と激しく共鳴しているのだ。

本稿では、ヘヴィメタルと古典古代をめぐる研究動向を紹介しつつ²、筆者なりに両者の関係性についてまとめてみたい。現状ではかなり特殊なテーマであり、特に西洋史研究者には戸惑いをもたらすかもしれないが³、それでこそ紹介する意義もあろうかと思う。

前提として、筆者がこうした問題に着目する理由について述べておこう。古代ギリシアにおける神話伝承を研究の起点としてきた筆者が重視するようになったのが、受容研究という観点である。特に、古典古代のテキストや思想、イメージ表現や物質文化が、なぜ、どのように、後世の異なる文脈において受容、利用、再解釈され、影響を及ぼしてきたかを問う、

¹ バンド名、楽曲名は、実際に楽曲を確認する際の利便性を考慮し、原語表記とした（多くが英語表記）。音楽情報は、バンド名（出身国・活動拠点、例えば英国なら GBR），“曲名”、アルバム名の場合はイタリック（発表年）といったように表記する。ただし既出や文脈上不要の場合は省略。

² 本文中でも述べるが、ヘヴィメタルと古典古代の関係をめぐって初の論文集が世に出るなど、関心が高まっている（K. F. B. Fletcher and O. Umurhan [eds.], *Classical Antiquity in Heavy Metal Music*, New York: Bloomsbury Academic, 2020）。実は同時期に、中世とヘヴィメタルについて論じる R. Barratt-Peacock and R. Hagen(eds.), *Medievalism and Metal Music Studies: Throwing Down the Gauntlet*, Bingley: Emerald Publishing, 2019 も刊行されているように、古典古代に限らず、ヘヴィメタルと歴史、過去の文化との関係に注目する動向がある。本稿では古典古代に焦点を当てるが、より広い視野のもと展開されるべきテーマであることは強調しておきたい。

³ 前提となるのが Classics（古典学）であり、歴史学のみならず神話や文学、哲学などの研究もそこには含まれる。また本稿筆者も、古代神話をめぐる文化史・受容研究に関心を抱いているため、本稿の内容は伝統的な西洋古代史の枠組みにおさまらない印象を与えるであろうことを申し添えておきたい。

古典受容研究 (Classical Reception Studies) ⁴を意識してきた。古典古代の歴史・文化は、西洋世界の遡源とされ様々な分野において受け継がれているわけなので、受容研究が意識される傾向は関連分野においてそもそもあったといえるが、特に近年の古典受容研究は、いわゆる「ハイカルチャー」だけでなく、コミックやアニメ、映画、ゲームなど、ポップカルチャーを視野に入れて研究が展開し、かなり活況を呈している。ただ、その動向を追ってきた者としては、コミック、アニメ etc. への注目はすでに氾濫気味とも感じるにいたっていた⁵。そこで、筆者がもともと音楽ジャンルとして興味をもっていたことも利点に、先鋭的な題材としてヘヴィメタルを取り上げてみたいのである。

2. ヘヴィメタルの成り立ちと展開

ヘヴィメタル(以後、HM と略記)の典型的イメージとして、激しく攻撃的な音楽性、死や戦争、悪を連想させる楽曲、関わるアーティストのファッションや行動、パーソナリティを含めて一般社会から逸脱している、といった一連の印象があると思われる。米国ではかつて、HM が悪魔崇拝を促していると批判され社会問題となったことも知られているかもしれない。しかし実のところ HM は、そうしたステレオタイプなイメージにそぐわない要素もまた多々取り込むことで発展・存続してきた。その様々な要素の一つであり、本稿で着目しようというのが、歴史や文学、特に古典古代への HM 的関心だ。まずは、そんなジャンルの成り立ちについて基本的情報を説明しておくべきだろう。なお HM の前提としてロックやパンクの系譜があるが、ここで詳細な現代音楽史の解説はできかねるので、本稿の理解に関わる場所に焦点をしばって簡潔にまとめることをご容赦願いたい⁶。

HM は英国で誕生したというのは共通認識であるが、最初に演奏したバンドについてはいくつもの捉え方がある。よく指摘されるところでは、1960年代末頃に活動を始めたバンド、Led Zeppelin と Black Sabbath がルーツとされる(それぞれ、69年と70年にデビュー。特に後者の名が挙げられることが多い)。HM という呼称自体が当初なかったし、先駆的音楽が他のバンドによっても演奏されていたといえるが、ここではその正確な起源の指定が主眼ではない。両バンドは、激しく重い音のほか、楽曲のテーマとして幻想的、オカルト的な題材、そして神話や歴史などを取り扱っていた点でも、フォロワーを生み出していく。初期に HM を発展させ、長らくジャンルのアイコンとなっていくバンドの一つとして、同じく英国の Judas Priest (1969年結成、1974年デビュー)も挙げておくべきだろう。

HM という呼び名の由来にも諸説あり、エレクトリック・ギターの音を歪ませることによるメタリックなサウンドからともいわれるし、Black Sabbath や Judas Priest のメンバーが暮らした工業都市、バーミンガムのイメージが影響しているとの指摘もある。彼らは製鉄工場

⁴ 受容研究については基本的・包括的文献としてひとまず以下を挙げておく。C. Martindale and R. F. Thomas (eds.), *Classics and the Uses of Reception*, Malden, MA: Blackwell, 2006; D. Lowe and K. Shaubudin (eds.), *Classics for All: Reworking Antiquity in Mass Culture*, Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2009; L. Hardwick and C. Stray (eds.), *A Companion to Classical Receptions*, Malden, MA: Blackwell, 2011; W. Brockliss and P. Chaudhuri et al (eds.), *Reception and the Classics*, Cambridge and New York: Cambridge University Press, 2012.

⁵ 以下のような書が続々と刊行されている状況にある。George Kovacs and C. W. Marshall (eds.), *Classics and Comics*, Oxford: New York: Oxford University Press, 2011; Brett M. Rogers and Benjamin Eldon Stevens (eds.), *Classical Traditions in Modern Fantasy*, New York: Oxford University Press, 2017; Owen Hodkinson and Helen Lovatt (eds.), *Classical Reception and Children's Literature*, London: I.B. Tauris, 2018; Christian Rollinger, *Classical Antiquity in Video Games: Playing with the Ancient World*, New York: Bloomsbury Academic, 2020.

⁶ HM 研究の先駆的業績として多くの論者が依拠しているのが、デポール大学の社会学者ディーナ・ワインスタインの書である (Deena Weinstein, *Heavy Metal: The Music and Its Culture [Rev. ed.]*, New York: Da Capo Press, 2000 [1991])。HM の成立や発展についても同書参照。邦語文献としては以下を挙げておく。イアン・クライスト (中島由華訳) 『魔獣の鋼鉄黙示録』早川書房、2008年; マイケル・モイニハン、ディードリック・ソーデリン (島田陽子訳) 『ブラック・メタルの血塗られた歴史』メディア総合研究所、2008年; 長谷川修平 『ヘヴィメタルを“読む”——なぜ NWOBHM は反逆者の音楽とされているのか』グループ・ゼロ (電子書籍)、2012年。

や製鋼所で働いており、当人たちの証言によると労働・生活環境に強く閉塞感を覚え鬱屈していたようだ。怒り、反社会や逸脱、死、現実と異なる世界の夢想といった HM の志向は、ここに源がある。ともあれ HM という表現は、70 年代前半に音楽評論家の間で使われ始め、普及していく。

大きく発展するのが 70 年代後半からで、当時の英国の状況を表現した言葉が、NWOBHM (ニュー・ウェイブ・オブ・ブリティッシュ・ヘヴィメタル) である。こうした流れのなかでデビューし、ジャンルを長らく牽引していくバンドの一つが Iron Maiden だ。幻想的物語や神話、歴史を楽曲の題材とすることをより広めたのも同バンドである。また先述の Judas Priest は、高音のヴォーカル、疾走感のあるギターリフ、レザー・ファッションを中心とした見た目における力強さ、男らしさの演出など、HM の伝統を定着させていった。ジャンルとして明確化する NWOBHM 以降に HM という呼称を用いる考え方もある。

英国内では数年で盛り上がりや沈静化したものの、ヨーロッパ各地や米国に HM は波及していった。欧米間での相互作用もあって多様なサブジャンルが展開し、また米国を介したことで市場は世界へと拡大する。そのため世界的知名度を得たバンドや作品も現れるが(米国で従来よりもポップで明るいイメージの HM も発展するが)、反社会的で、異端であること、反商業主義であることが本質的には意識されるジャンルなので、HM 全体としてはあくまでマイナーであり続けたといえるだろう。それゆえ、一時の流行ではなく強く惹かれるファンの支持もあって存続してきたのが HM である。

HM には全てを紹介しきれないほど多くのサブジャンルがあるのだが、本稿の理解につながるどころについて補っておく。米国で HM が受け入れられていくと、より速いテンポ、より攻撃的なサウンドを強調するスラッシュメタルが展開した。代表的バンドが Metallica や Slayer である(ともに 81 年デビュー)。そこから派生したのが、デスメタルだ。激しさがより追及されつつ、かなり声などと形容される独特なヴォーカル(いわゆるデスヴォイス)が導入され、バンドのイメージや楽曲として死や地獄といったテーマが強調された。さらにそこから生じたのが、ブラックメタルである。その名は NWOBHM バンド、Venom (GBR) のアルバム *Black Metal* (1982) に由来する。歌詞の内容として、悪魔崇拝(サタニズム)に象徴される反キリスト教的なイメージ・思想を重視しているのが特徴である。

なお 80 年代の後半に、以上のような荒々しいサウンドに対するリアクションとして、また前掲の Judas Priest や Iron Maiden の系譜を受け継ぐものとして、スピード感だけでなくメロディアスな楽曲に高音のヴォーカルを合わせたパワーメタル(あるいはメロディックパワーメタルやメロディックスピードメタルとの呼称もある)が発展する。代表的なバンドに Helloween (DEU) が挙げられる。転じてデスメタル系バンドにもメロディアスな楽曲を重視する者たちが現れ、メロディックデスメタルというジャンルも誕生するにいたる。実は本来、HM は激しさだけでなく旋律の美しさや劇的な曲展開を好む傾向も有する。理由の一つは、クラシック音楽の要素も取り込んでいたブリティッシュ・ハードロック(Deep Purple など)が HM の源流にあるゆえだ。ともあれ、以上のようなメロディアスな系統は日本でも人気を得ている。HM のなかでも受け入れられやすいのだろう。

HM には男性的イメージが強いが、もちろん女性ファンも女性ミュージシャン(さらには女性だけのバンド)もいる。感傷的なゴシックメタル、オーケストラや合唱を取り入れたシンフォニックメタル、オペラのような歌唱を用いるオペラティックメタル(オペラメタル)には、女性ヴォーカルや女性ファンが特に多いことも付言しておこう。

さらに本稿との関わりでふれておきたいのが、叙事詩的な題材・曲構成を特徴とするエピックメタルである⁷。80 年代初期に生まれ、特にファンタジー小説や神話、歴史上の英雄的

⁷ エピックメタルについて解説したものに、電子書籍として公刊されている以下がある。大橋大希、METAL EPIC 編集部『エピック・メタル・ヒストリー: 叙事詩的なヘヴィメタルの歴史』Vol.1 & 2、2016 年(Amazon で公刊されている電子書籍で、先に分割して配信されていた内容をまとめ加筆した音楽論)。参考となるところが少なからずあるが、典拠についての詳しい説明・註はない。

人物や関連する出来事を題材とし、音楽的には伝統的要素を踏襲しつつも、勇壮さ、壮大さ、劇的な展開を重視する。代表的なバンドとして、Manilla Road (USA)や Virgin Steele (USA)が挙げられる。

エピックメタルに顕著だが、HMにはストーリー性を求める傾向があり、コンセプト・アルバム、すなわち複数の楽曲が連なり全体として一つのテーマやストーリーを語るアルバムがよくある(HMの源流の一つであり、複雑な曲構成を発展させたプログレッシブ・ロックからの影響も指摘できよう)。HMでは激しさと並行してスピード感を強調しがちであったことに加え、ストーリー性をもつ複雑な楽曲の志向のため、どの楽器についても高度な演奏技術が伴う。ギターソロが必須であることや、バンド形態で活動するのが前提であるのは、こういったところに由来する。

他にもサブジャンルが数多くあるのだが、ここで全てを扱うことはできない(北欧メタル、ヴァイキングメタルにはあとで少しふれる)。また、日本でのHMの受容や展開も今回は捨象せざるをえない。簡単に語り尽くせないほどHMは展開しているともいえるだろう。

3. 研究の黎明

では、楽曲、特に歌詞に認められる古代の歴史・文化への関心を中心に、研究動向を概観していく⁸。古典古代の題材に着目したところでは、伝説上のトロイア戦争について歌ったホメロスの叙事詩『イリアス』の主人公であるアキレウス(アキレス)や、東方への大遠征をおこなったアレクサンドロス大王を、HMが求める力強い英雄像として分析した Eleonora Cavallini (ボローニャ大学、古代ギリシア文学)、Iain Campbell (エディンバラ大学、美学)らの論が、初期の研究例として挙げられる(ともに2009年)⁹。アキレウスは、Manowar (USA), “Achilles, Agony and Ecstasy in Eight Parts” (1992)、Warlord (USA), “Achilles Revenge” (2002)などにおいて取り上げられており¹⁰、HMにおける人気の題材の一つである。ギリシア随一の戦士と謳われるアキレウスは、自らの死の運命を知りつつも栄誉を求めギリシア連合軍に加わり、トロイアに出征した。しかし、総大将との諍いで戦場より身を引くことになる。叙事詩『イリアス』のテーマは、冒頭に語られるようにここに発する「アキレウスの怒り」であることはよく知られている。そしてアキレウスは盟友の死をきっかけに戦場に復帰、怒りを宿敵に向けるのである。こうした物語をふまえ Cavallini は、強さ、抗い、怒りといった要素のもとに、アキレウスこそ HM にとって象徴的な英雄と解する。ギリシア神話およびそれをもとにしたギリシア悲劇に登場する英雄たちと HM の親和性については、アイスキュ

⁸ 恣意的にならざるを得ないところがある調査のため補足的に言及するにとどめるが、2018年時点で、ギリシア、ローマ、エジプトなど古代地中海世界の歴史・文化に関わるHMのバンド名の数は、2,000に迫るほど多かったという。M. Lindner and R. Wieland, “Horus and Zeus Are Playing Tonight—Classical Reception in Heavy Metal Band Names” *New Voices in Classical Reception Studies* 12, 2018, p.32-46. もちろん、そのような名称のバンドが皆、古典古代を題材とする楽曲を生み出しているとは限らないが、こういった研究に関心を抱く前から筆者自身も、古代、特に古代神話の神々に由来するバンドやアルバム名がたいへん多いと感じていた。ところで、このような調査にも参考となるのが、HMバンド・楽曲に関する情報を網羅したオンラインデータベース *Encycropaedia Metallum: The Metal Archives* である。以下で紹介する論者たちもよく参照している。なお、以下ではHMと古典古代の関係性について、主に楽曲のテーマ性、歌詞が中心的に検討されている。演奏面、アートワーク(アルバムのイメージイラスト等)、バンドのファッションなどにも言及している場合もあるが、参考程度にとどまるのがほとんどである。今後、こうした観点も含めての研究展開もあるかもしれないが、ここでも楽曲のテーマ性と歌詞を念頭に叙述する。ただし紙幅の都合もあり、歌詞を長く引用して細部を検討するといったことが今回はできかねる。様々なメディアで原典＝楽曲に容易にアクセスできるようになっているので、興味があれば直接確認していただきたい。

⁹ E. Cavallini, “Achilles in the Age of Steel. Greek Myth in Modern Popular Music” *Conservation Science in Cultural Heritage* 9, 2009, p.113-30; Iain Campbell, “From Achilles to Alexander: The Classical World and the World of Metal” in G. Bauer (ed.), *Heavy Metal Music in Britain*, Farnham: Ashgate Publishing, 2009, p.111-24.

¹⁰ Led Zeppelin にも “Achilles Last Stand” (1976) という曲があるが、ここでは「かかとを矢で射られた英雄アキレウス」がメタファーとして用いられるにとどまる。

ロス作の悲劇『オ레스ティア』三部作（前 458）が Virgin Steele のアルバム（*The House of Atreus - Act I & II* [1999-2000]）においてどのように継承されているかを E. Liverani (ILUM 大学、文学・翻訳) が論じていたし¹¹、近年では H. González-Vaquerizo (マドリード自治大学、古典学) がさらに多くの例を取り上げて分析している¹²。

そのような関心のベクトルが神話にとどまらず歴史的題材に及んでいる。アレクサンドロス大王については少し後に述べるとして、強い兵士の育成で知られたギリシアのスパルタに先にふれておこう。スパルタに関して特に人気の題材が、ペルシア戦争における戦いの一つで、ヘロドトスの『歴史』第 7 巻に叙述されているテルモピュライの戦いである。前 480 年、スパルタ王レオニダス率いる精鋭 300 人が、ギリシアに攻め寄せたペルシア軍と峻険な土地テルモピュライにおいて対決した。ギリシア最強と謳われたスパルタ兵たちは、少なく見積もっても数万人と思われるペルシア軍に対し奮戦、その進撃を食い止める。圧倒的に数でまさるペルシア軍に次第に押され、レオニダスを含め 300 人はほとんどが命を落とすことになるが、この間にギリシア人同胞が海戦準備を進め、最終的なギリシア側勝利にもつながったという重要な戦いである。これを題材としたものに例えば *Sacred Gate* (DEU), *Tides of War* (2013) というコンセプト・アルバムがある。HM が勇ましいスパルタを重視することについては J. Swist (ブランダイス大学、古典学) の論考に詳しい。関連するところとして Swist は、狼のイメージを介してスパルタ兵やローマ軍団の勇ましがヘヴィメタルにおいて表象されていることも論じている¹³。また Swist が断片的に論及しているように、命をかけた戦うローマの剣闘士、またその剣闘士であったスパルタクスが主導した奴隷反乱（前 73～前 71 年）も、こうした題材の系譜に連なり、*Sortilège* (FRA), “*Gladiateur*” (1983)、*Omen* (USA), “*In the Arena*” (1984) といった楽曲がある。

すでにその英雄像への着目にふれたように、東方遠征によって短期間で大帝国を形成したアレクサンドロス大王も HM にとって重要で、*Iron Maiden "Alexander the Great"* (1986) 以来、アレクサンドロスを題材とした多くの曲がある。特に現代ギリシアの HM バンドの曲においては、ギリシアの偉大な過去を体現し、新しい共同体を生み出した人物として賛美されるというナショナリズム的な傾向を C. T. Djurslev (オーフス大学、古典学) が指摘している¹⁴。

この点では、後述する論文集の編者の一人である K. F. B. Fletcher (ルイジアナ州立大学、古典学) も、HM における古典古代への注目とナショナル・アイデンティティを結びつけて理解している¹⁵。典型的なところとして、ギリシアのバンドが古代ギリシアに、イタリアのバンドは古代ローマに、自らの偉大な過去として目を向けるケースが増えているというの

¹¹ Elena Liverani, *Da Eschilo ai Virgin Steele. Il mito di Oreste nella musica contemporanea*, Bologna: Dupress, 2009. Virgin Steele のソングライター、David DeFeis は、父親が演劇のプロデューサーでもあったことから、古代ギリシア悲劇をはじめとした古典文化に造詣が深く、それらを題材とした楽曲を多く生み出している。なかでも、ドイツにおいて DeFeis の作品を舞台化するオファーがあったことをきっかけに制作されたのが *The House of Atreus - Act I & II* で、ここに収録される楽曲をもとにした歌劇『クリュタイムネストラ』と、それ以前のアルバムをもとにした『反逆者』がドイツで上演された。

¹² Helena González-Vaquerizo, “*Κλέα ἀνδρῶν*: Classical Heroes in the Heavy Metal” in: Rosario López Gregoris and Cristóbal Macías Villalobos (eds.), *The Hero Reloaded: The Reinvention of the Classical Hero in Contemporary Mass Media (IVITRA Research in Linguistics and Literature 23)*, 2020, p.51–72.

¹³ Jeremy Swist, “Sparta and Metal Music’s Reception of Ancient History” in: Jan-Peter Herbst (ed.), *The Cambridge Companion to Metal Music*, Cambridge: Cambridge University Press, 2023, p.99-113; id., “‘Wolves of the Krypteia’: Lycanthropy and Right-Wing Extremism in Metal’s Reception of Ancient Greece and Rome” *Metal Music Studies* 8-3, 2022, p.309-25.

¹⁴ Christian Thru Djurslev, “The Metal King: Alexander the Great in Heavy Metal Music” *Metal Music Studies* 1-1, 2014, p.127-41. これは、初めての学術的ヘヴィメタル研究誌である *Metal Music Studies* 創刊号に掲載された。

¹⁵ K. F. B. Fletcher, “The Metal Age: The Use of Classics in Heavy Metal Music” *Amphora* 12-1, 2015, p.8–9; id., “Classical Antiquity, Heavy Metal Music, and European Identity” in M. Fernando Lozano Gómez (ed.), *The Present of Antiquity: Reception, Recovery, Reinvention of the Ancient World in Current Popular Culture*, Besançon: Presses universitaires de Franche-Comté, 2019, p.223-46.

である。ニューメキシコ大学の O. Umurhan (ニューメキシコ大学、古典学) も、アレクサンドロス大王に加えて、Ex Deo (USA, CAN) が扱うローマ史の諸題材を例に、関連地域・国の偉大な過去への傾倒を指摘していた¹⁶。

そして Fletcher と Umurhan が編者となって 2020 年に刊行された論集が *Classical Antiquity in Heavy Metal Music* である¹⁷。今度はこの内容について見ていこう。まずは、先述のようにナショナル・アイデンティティと結びつく関心が論じられている。Fletcher は、ローマ創建につながる英雄アイネアス (アエネアス) の神話物語を語りつつ皇帝・帝国を賛美する、ウェルギリウスの叙事詩『アエネイス』を題材とした 2 つのコンセプト・アルバム、すなわち Heimdall (ITA), *Hesperia* (2013) と、Stormlord (ITA), *Aeneid* (2013) を取り上げ、あらためてナショナル・アイデンティティ意識を指摘するが、それらが必ずしも政治的主張と直結せず (しないからこそ)、ローカルな歴史観や文化遺産が HM というグローバル化した音楽ジャンルにおいて表現され伝えられていく「グローカライジング (glocalizing)」な動向にも留意を促す¹⁸。

また M. Taylor (ベロイト大学、古典学) は、Eluveitie (CHE)、SuidAkrA (DEU) といったバンドを例に、ローマではなくそのローマに対抗したケルト系部族などの視点から、HM においてこそ強調される「サバルタン」的な歴史観の表象に注目している¹⁹。

ギリシアに関しては C. Apergi (アテネ大学、古典学) が、同国のバンド Kawir に着目し、古代ギリシアの神々への讃歌 (hymns) を取り込んだ楽曲による伝統復古について論じた²⁰。

なお、ギリシア、イタリアでのナショナル・アイデンティティ的関心を注視してきた編者 Fletcher は、1980 年代末頃から北欧を中心にヴァイキングのイメージや歴史、北欧神話を題材とするヴァイキングメタルが台頭していた影響をそこに見ており、ヴァイキングメタルと連動するようなギリシア・イタリアの動向を「地中海メタル」と表現している²¹。

続いてはジェンダーの観点からの論考である。L. Åshede (ヨーテボリ大学、古典考古学・古代史) と A. Foka (ウプサラ大学、人文情報学) は、トロイア戦争の物語に登場し予言の力を有する (が聞き入れてもらえない) 女性カサンドラを、L. Crofton-Sleigh (サンタクララ大学、古典学) は先述の『アエネイス』においてアイネアスを愛したカルタゴ女王ディドの描き方をそれぞれ題材として²²、現実の HM への女性参加をふまえつつ、運命や苦境に對峙する女性の描き方に男性的なそれとは異なる「強さ」を見ている。

I. Magro-Martinez (バスク大学、古典学) は、Ex Deo, *Caligvla* (2012) などを対象に、後代の史料によって狂気じみたイメージが流布することになった第 3 代ローマ皇帝カリグラ (位 37-41) が「悪」の象徴として思い描かれていると論じた²³。なおローマ皇帝についてはこの論集刊行の前後に発表されている J. Swist の論考もあり²⁴、これらについては後でふれる。

¹⁶ Osman Umurhan, “Heavy Metal Music and the Appropriation of Greece and Rome” *Syllecta Classica* 23, 2012, p.127-52.

¹⁷ 本稿註 2 参照。以下、*CAHM*。

¹⁸ K. F. B. Fletcher, “Vergil’s Aeneid and Nationalism in Italian Metal” in: *CAHM*, Ch.1, p.23-52. 後述の論考でも言及されているが、一方で極端な例としてはナチズムあるいはそれに類する思想を肯定するナショナル・ソシャリスト・ブラックメタル (NSBM) という動向もある (このことも含めてブラックメタルについて詳しくは前掲『ブラック・メタルの血塗られた歴史』参照)。

¹⁹ Matthew Taylor, “Eternal Defiance: Celtic Identity and the Classical Past in Heavy Metal” in: *CAHM*, Ch.2, p.53-76.

²⁰ Christodoulos Apergis “Screaming Ancient Greek Hymns: The Case of Kawir and the Greek Black Metal Scene” in: *CAHM*, Ch.3, p.77-96.

²¹ Cf. K. F. B. Fletcher and Osman Umurhan, “Introduction: Where Metal and Classics Meet” in: *CAHM*, p.1-22.

²² Linnea Åshede and Anna Foka “Cassandra’s Plight: Gender, Genre, and Historical Concepts of Femininity in Gothic and Power Metal” in: *CAHM*, Ch.4, p.97-114; Lissa Crofton-Sleigh “Heavy Metal Dido: Heimdall’s ‘Ballad of the Queen’” in: *CAHM*, Ch.5, p.115-129.

²³ Iker Magro-Martinez “A Metal Monstrum: Ex Deo’s Caligula” in: *CAHM*, Ch.6, p.131-153.

²⁴ Jeremy J. Swist “Satan’s Empire: Ancient Rome’s Anti-Christian Appeal in Extreme Metal” *Metal Music Studies* 5-1, 2019, p. 35-51; id., “Enjoy My Flames: On Heavy Metal’s Fascination with Roman Emperors” *Latham’s Quarterly* 23, 2022 (<https://www.laphamsquarterly.org/roundtable/enjoy-my-flames>).

一方、J. Secord (カルガリー大学、専門性開発論) は、Celtic Frost (CHE)、Therion (SWE)、Bal-Sagoth (GBR)の諸作品を取り上げ、米国の作家ロバート・E・ハワードの『コナン』シリーズに代表される「ヒロイック・ファンタジー」の世界、同じく米国の作家H・P・ラヴクラフトに由来するホラー小説・物語体系「クトゥルー神話」への強い傾倒と、さらにはバンド独自の創作展開を確認していく。そして、これらに反映されたオカルト的・前近代的な世界への興味と憧憬が、古典古代への関心と連続性を有することが示唆される²⁵。

L. Olabarria (バーミンガム大学、エジプト学) は、Nile (USA)が歌うオリエンタリズムの古代エジプト像を例に、HMにおいて求められる古代イメージの析出を進めた²⁶。

論集では最後に Umurhan が総括しつつ展望を述べており²⁷、古典古代が新たな意味を持ち続けるであろうことに注意を喚起しているのが印象的である。

これからの研究進展が期待されるが、本稿筆者としては、個別事例の検討の積み重ねがもちろん重要であることは承知しつつも、そもそも「なぜ HM において古典古代への関心が生じ、それが展開し続けているのか」との俯瞰がもう少しあってしかるべきではないかと感じる。それは今後の展望のためにも有益であろう。実証とまではいたらないような補足となるだろうが、筆者なりにまとめてみたいと思う。

4. 古典古代へのヘヴィメタル的まなざし

HM が古典古代を意識する背景を整理していくためのキーワードは、前近代性 pre-modernity、反近代性 anti-modernity、そして反キリスト教 anti-Christianity であると考えられる。

根底において厭世的で反社会的なベクトルがはたらいていることから、HM には、現実と相対するような、そして現実を相対化するような想像の展開志向もある。そのため、異世界を描くファンタジー小説にも HM は惹きつけられてきた。それと「リアル」な古典古代の歴史や文化とは全く異なると思われるかもしれないが、前近代・反近代性という観点からすれば、ファンタジーと神話、さらには歴史には、連続性・類縁性がある。エピックメタルの代表的バンド、Manilla Road の *Gates of Fire* (2005) では、先述の『コナン』の想像世界 (ファンタジー)、古代ローマの叙事詩『アエネイス』(神話からローマの歴史へ)、そしてテルモピュライの戦い (古代ギリシアの歴史的出来事) が連なる物語のごとく描かれているのが象徴的である。そうした観点からすると、必然的に (ファンタジーの源流であるような) 中世の歴史や文化への関心とも連続する。今回は古典古代に限定しているが、より広い視野で考えるべきであろう。

さて、そうした前近代・反近代という前提のもと、特に反抗的な勇ましさという、HM が本質的に重視する要素がからんで、HM が求める英雄たちの姿や物語が古典古代に見出されてきた。いかに勇ましい者であっても、清く正しいイメージが先に立ち、穏やかに晩年を迎えたような者は、本来の HM にとって英雄ではない。一方、HM の精神性においてこれも重要である「死」を連想させる者にこそ、HM は惹きつけられる。そうした意味で既出のアキレウスは格好の題材だ。アキレウスは死の運命を知りながら参戦し、弱点である「かかと」を矢で射られ、命を落とす。アキレウス以外にもトロイア戦争に関わる英雄たちがギリシア悲劇の題材になったように、神話の英雄たちの多くは悲劇性を帯びている。

現実の歴史的出来事においても、テルモピュライの逸話は兵士たちが勝ち目のない戦いに挑み、ほとんどの者が命を落とした悲壮なものであった。この戦いをテーマにした Sacred

²⁵ Jared Secord “Occult and Pulp Visions of Greece and Rome in Heavy Metal” in: *CAHM*, Ch.7, p.155-171. なお、Secord の論にも関連するのが、筆者が関心を寄せてきた「失われた大陸」をめぐる伝説・言説である (拙著『アトランティス=ムーの系譜学』講談社、2022年)。Bal-Sagoth, *Atlantis Ascendant* (2001)、Manilla Road, *Atlantis Rising* (2001) など、失われた大陸も HM と関わりが深いので、別に論じてみたい。

²⁶ Leire Olabarria “When the Land Was Milk and Honey and Magic Was Strong and True”: Edward Said, Ancient Egypt, and Heavy Metal” in: *CAHM*, Ch.8, p.173-199.

²⁷ Osman Umurhan “Coda: Some Trends in Metal’s Use of Classical Antiquity” in: *CAHM*, Ch.9, p.201-216.

Blood, “Heroic Spirit” (2008)では、兵士たちに対して「アキレウスの真の末裔」として「命を犠牲にすることを厭うな」と呼びかけられている。アキレウスを敬っていたと伝えられるアレクサンドロスは、東方の大国ペルシアに立ち向かい、これを打ち破ると遠征を継続して未曾有の広大な領域を支配していくが、病に倒れ、彼の死後に帝国は瓦解してしまう。Manilla Road, “Conqueror” (2017) では、偉大な王としてアレクサンドロスが讃えられつつも、「我々全て、卑俗な人間たちをつなぎとめている鎖を断ち切り先に進んでしまったことが、彼の破滅の始まりだった」として、偉業と悲劇とが重ね合わされている。

ローマの奴隷や捕虜が生きて抗う道でもあった剣闘士試合は常に死と隣り合わせであり、また剣闘士であったスパルタクスはローマに対して反乱を起こすが鎮圧された。軍勢を率いてルビコン川を渡りローマの支配権を握るが、暗殺されるカエサルもここに連なるだろう。Ancient Rites(BEL), “Rvbicon” (2006)では、カエサルについて「汝の運命は勝利かヴァルハラだ」と表現されている。ヴァルハラとは北欧神話において死者の魂が集う場所で、勝利と死が表裏一体であることを強調しているのだ。一方、強大なローマに立ち向かい、勝利したとしてもローマの栄光の影に隠れがちである者たちもまた、HM では脚光を浴びるのであった。

HM のアルバムにおいて、あるいは一曲のなかで、これら複数の題材が関連づけられているケースがよくあることから、傾向がより浮き彫りとなる。Naer Mataron (GRE), “Ancestor-Worship” (2003)では、父祖の世界の重要な出来事として、テルモピュライの戦い、アレクサンドロスの遠征、そしてアキレウスの参戦が連続して取り上げられる。Ancient Rites, *Rvbicon* (2006)では、カエサル (“Rvbicon”) と、テルモピュライ (“Thermopylae”)、紀元9年のトイトブルク森の戦い (“Chervscan”)、各々をメインにした曲が収録されている。Sacred Blood がテルモピュライをテーマにしたコンセプト・アルバム *The Battle of Thermopylae: The Chronicle* (既出) に続いて制作したのが *Alexandros* (2012) だった。Manilla Road, *To Kill a King* (2017) にも、アレクサンドロスについての“Conqueror”と共に、剣闘士が題材の“The Arena”、トイトブルク森の戦いを歌う“Ghost Warriors”が収録されている。

HM において曲のタイトルや歌詞に非常によく用いられる言葉の一つが、*rebellion* だ。反乱、反抗などと訳されるが、「自身よりもずっと大きな存在、権威的存在に立ち向かう」ニュアンスを帯びていたり、「不成功に終わる、悲劇にいたる」ことをときに含んでいたりするのが特徴である。運命、強大な敵など、何かに立ち向かい、偉業と悲劇という二面性をもつような *rebellion* を、HM は以上のような題材に見出している。それはまた、HM のストーリー性重視にも沿うといえる。

もちろん HM 的な解釈はアカデミックなそれと様々に異なる場合がある。かつて Iron Maiden がアレクサンドロス大王の生涯をテーマとして楽曲を生み出したときに念頭に置かれたのは、彼によってヨーロッパの優れた文化が広められたとするような、かなり古典的なアレクサンドロス像でもあった²⁸。特に、歴史上の人物を安直に英雄視することは、歴史研究によって明らかにされる実態と齟齬をきたしやすい。ただし、万人が賛美するような人物像を望んでいるわけではない HM には、単純な英雄史観を抑制するような傾向もまたあること、そして HM に対して「正しい歴史」の理解を促すことがここでの本題ではないことをことわっておこう。

古典古代に関わる題材はこれだけとは限らない。HM の志向に沿う題材、特に *rebellion* 的な題材が多く見出せるからこそ、HM と古典古代は共鳴し続けてもいるのだろう。既述のように古典古代にばかり閉じてはならないが、古典古代が意識される理由として考えるならば、近現代の対極として HM が求めるような野蛮さや荒々しさが感じられやすいとか（「ローマに敵対した部族」にはそうしたイメージがより強く重ねられているといえる）、古い時代ほど実態が定かではないところが多く、想像が投影できる余地が大きい、ということもあ

²⁸ アレクサンドロスのイメージと実像については、森谷公俊『アレクサンドロスの征服と神話』講談社学術文庫、2016年。

るかもしれない。キリスト教が HM の抗う対象でもあるため、キリスト教以前あるいはキリスト教と古代の諸文化の相克という観点からも古典古代は重要といえそうだ。これはすぐ後にあらためて述べよう。また、1960年頃から80年代にかけてイタリアや米国でさかんに製作された、古典古代に題材を取った映画群や、21世紀において古典古代のイメージを巷間に広めたといえる米国の映画『グラディエーター』(2000)や『300』(2006)など、いわゆる「ソード&サンダル」における古代の戦士たちの力強い筋肉美のイメージも、勇ましさや力強さの観点から影響しているのではないと思われる。さらに、古典古代はさまざまな面でやはり男性優位の傾向が強かったゆえに、抑圧されてきた女性たち、転じて抗う女性というテーマもまた見出しやすい(註22参照)。

そして、前近代・反近代性とも密接に関わるのが、反キリスト教という志向だ。西洋の伝統的でスタンダードな価値観・世界観の一つがいうまでもなくキリスト教である。反社会、既存の価値観の破壊といった思想が根底にある HM にとって、キリスト教が世に定着する前、あるいはキリスト教との相克があった時代としても、古典古代が意味をもつ。Swist も、ローマ皇帝のなかでカリグラやネロなどが HM において特に注目されるのは、キリスト教(的な倫理)に相対する象徴として捉えられているため、と指摘している(註24参照)。第5代皇帝ネロ(位54-68)のように直接的にキリスト教を迫害したと伝えられる場合はもちろんだが(先述のように、そうした皇帝像がどこまで正しいかはここで問わない)、そうでなくても、キリスト教が広まる以前のローマ帝国は、反キリスト教という観点から解釈されやすいのである(ただし、キリスト教を肯定的にテーマとするアンブラックメタルといったジャンルもある。従来のブラックメタルへの反抗として、これはこれで HM 的に成り立つわけだ。キリスト教が HM と全く相容れないわけではない)。

反キリスト教は、必然的に悪魔や魔女のシンボリズムと密接に結びつく。これらの題材を HM が好む所以でもある。キリスト教が普及する前の古典古代には、多神教の多様で盛んな崇拜と、神々についての豊かなイメージ・物語も存在した。それらは無数のバンドや楽曲において注目されているが、なかでも典型的な題材といえそうなのが、ディオニュソス(バックス)である。

古代ギリシアにおいて崇められた主要な神々の一柱であるディオニュソス²⁹、別名バックス(ローマではバックスと呼ばれ、英語でバックス Bacchus)は、酒、祭りの神で、人々に集団的狂乱をもたらすと考えられた。エウリピデスによって前5世紀末に書かれた悲劇『バツカイ(バックスの信女)』には、以下のような神話物語が伝えられている。ギリシア中部テバイの王ペンテウスは、ディオニュソス信仰を危険視して禁じ、ディオニュソスを捕らえようとする。しかし、ペンテウスの母を含むテバイの女たちはその信仰に狂乱していた。そして狂気にとらわれた女たちは、ペンテウスを八つ裂きにして殺してしまうのだった。ディオニュソスという名の神自体はかなり古くから確認できるが、どうやらその信仰には、のちに伝わってきた東方の集団的狂乱・陶酔を伴う宗教の要素が強く影響を与えたようである。『バツカイ』のような物語は、その信仰がときに警戒されながらも広まっていったことを反映しているのだろう。

ニーチェは、古代ギリシア文化の理性的な面を、学問や芸術を司る神アポロンのイメージで捉える一方で、ディオニュソス信仰が狂乱を伴うものであったことを念頭に、ギリシア文化の非理性的な面はディオニュソスのイメージで捉えたことが知られている。ディオニュソスは、人間の文化の類型を考えるうえで象徴的な存在となったのである。そして HM 研究の先駆者 D. Weinstein は、HM 精神の中心に「カオスとディオニュソス」があると表現した³⁰。秩序を破壊して混沌をもたらし、狂騒を現出させるのが HM だというのである。そのため HM のライブは、ディオニュソスのもたらす狂乱によく喩えられもする。

²⁹ 古代のディオニュソス崇拜および後世へのそのイメージの継承・影響については Richard Seaford, *Dionysus (Gods and Heroes of the Ancient World)*, London and New York: Routledge, 2006.

³⁰ Deena Weinstein, *op.cit.*, p.35-43.

そのディオニュソスを題材としている近年の例に、Virgin Steele のコンセプト・アルバム、*Black Light Bacchanalia* (2010)がある (バッカナリアとはすなわち、バッカス、ディオニュソスの祭典)。ここで長い歌詞を掲載しての検討はできかねるので概略を述べるが、本作は、キリスト教によって古代信仰、特にディオニュソス崇拝が抑圧され失われていった様を語りつつ、異教の世界観へのノスタルジックな憧憬を表現し、現代の諸宗教に対する批判を示唆していた³¹。ソングライターである David DeFeis のインタビューも参考に紹介しよう³²。DeFeis は本作において異教が失われた転回に注目したと述べている。それは、宗教に限らない現代の諸問題の根源が、古代に遡ると考えているからなのである。前作 *Visions of Eden* (2006)から連続しているテーマ性もそこにあり³³、古代における肯定的な女神信仰が失われたことが、女神に象徴される女性たちの抑圧にもつながってきたのだとの DeFeis の考えが³⁴、本作においてもあらためて投影されている³⁵。このように古代の異教に目を向けて現代世界に対し批判的であることを、DeFeis も *rebellion* と表現しているのが興味深い。やはり HM 精神と共鳴してこそこの題材選択なのであり、古代宗教や神話をテーマとする無数のバンド・楽曲に共通する意識が見て取れるだろう。

このようにして、前近代・反近代性と反キリスト教の志向が密接に絡まり合いつつ、HM において古典古代が求められ続けているのである³⁶。

5. 課題と展望

最後に、課題と展望を合わせて述べておきたいと思う。動向紹介ということで本稿ではあまり踏み込まなかったが、歌詞の詳しい分析が必要であることはもちろんであるし、それ以外にも、関連するアートワーク、ミュージシャンやファンの意識など、何をどこまで取り込んでいくか、素材や方法論についてまだまだ考えねばならないことが多い。また、題材とされた古典古代の諸要素の解釈について、さらなる確認と分析も必要であろう。ただしそれは、正しさの是非を問うことが主眼ではなく、「求められる古典古代」像を浮き彫りとするためである。HM においては、古典古代が西洋の遡源だから重視されているのではない。そういった教科書的、権威的な見方には反抗的であるのが HM だ。それでも HM は古典古代に惹かれている。伝統的な教養知識とは異なる角度から古典古代の魅力が見出せるならば有益ではないだろうか。それはアカデミックな次元では「正しくない」ところがあるかもしれない

³¹ なお同バンドは近作 *The Passion of Dionysus* (2023)でも先述の悲劇『バッカイ』を素材として理性と非理性の対立を描いている。

³² <https://metalschockfinland.com/2010/11/06/interview-david-de-feisvirgin-steele-in-the-glow-of-the-black-light/> (2024年3月25日に閲覧)

³³ 前作リリース時のインタビューも参照。https://www.powerofmetal.dk/interviews/virgin_steele.htm (2024年3月25日に閲覧)

³⁴ ただしこの点については、女神信仰が女性への敬いに直結するわけではないことに留意も必要だろう。拙稿「古代ギリシアにおける女神の象徴性—アテナ、アルテミス、デメテルを例に」京都大学大学院文学研究科西洋史研究室『西洋古代史研究』11号、2011年12月、63～81頁。

³⁵ アルバム *Visions of Eden* には、*The Lilith Project - a Barbaric Romantic Movie of the Mind* とのサブタイトルが付されていた。リリス (リリト) とは、ユダヤ・キリスト教の伝統における女の悪霊あるいは魔女だが、「実は女神だったリリスは、のちの宗教のもとでそのイメージがネガティブなものに変えられてしまったのではないか」との想定がある (古代の異教の神々が特にキリスト教のもとで悪魔などに変えられてしまった、との指摘に類似するが、リリスのイメージの変化を実証的に明示するのは難しいといえる)。また *Barbaric Romantic* (野蛮でロマンティック) という言葉によって、DeFeis はかねて自らにとっての HM を表現してきた。

³⁶ 先にふれたナショナル・アイデンティティと HM との関わりについては、結果的な表出というように捉えるべきではないかと現時点では考えている。つまりナショナル・アイデンティティを求めて古典古代に目を向けるというより、HM 全体の志向性として前近代・反近代の重視があり、その結果の一つとしてナショナリズム的 (に見える) 関心もあらわれているのではないだろうか。そう考えてナショナリズムとの関連までは詳しく論じなかったが、ヴァイキングメタルなどとの比較も必要だろう。

いが、継承される古典古代の一面として重要であり、翻って古典古代とは何か、あらためて理解が深まるというものだろう。

すでにふれてきたように、古典古代と HM について理解しようとするほど、古典古代を越えたところを意識する必要も生じてくる。古典古代を楽曲で扱うバンドは、中世に関わる諸題材、キリスト教と異なる伝統としてヴァイキング、北欧神話なども取りあげる傾向があるのだ。また、古典古代、そして HM の受容は欧米以外にも及んでいる。こうした点で、視野の拡大が必須であろう。

諸領域の壁を壊し、新たな対話や研究の切り口がもたらされることを期待したい。まずは、HM の精神にならって伝統的な学問の枠組みに反抗する意識をもつべきかもしれない。

(関西大学等非常勤講師)